

ジャンボ渡辺の学 富士山学

前回は、中学2年の私が友人とふたりで駿河湾の海水20リを背負い、海沿いから歩いて富士山山頂を目指す話を紹介しました。今回は、山頂を経由してゴールに至る後半の話です。

海水のポリタンクは重く、両肩に食い込みました。こんなとっぴな挑戦を考えた自分の発想にあきれ、途中でやめてしまおうと何回も思いました。

しかし、多くの登山者から励まされ、やっとのことで山頂にたどり着き、ポリタンクの海水を山頂にまきました。

「神池」に山頂の雪解け水流す



渡辺豊博さん

そして、奥宮に参拝し、山麓の住民にお願いされたお札を買いました。疲れが溶けていくような達成感と充実感で心が満たされました。この時、富士講とは登山の苦しさやつらさを乗り越えてこそ実感できる「体験型の信仰」だと、子どもながらに理解できました。

富士山の伏流水は駿河湾に湧き出していると考えられています。その道筋をなぞろうと、「お鉢」と呼ばれる火口付近の残雪をポリタンクに詰め、ゴールと定めた静岡県沼津市の「大瀬明神の神池」

「体験型の信仰」に充実感



駿河湾の大瀬崎にある「大瀬明神の神池」。富士山の伏流水が湧き出ているとされ、海に囲まれているのに淡水だ。静岡県沼津市、伊豆半島ジオパーク推進協議会提供

に戻すことに決めました。下山では、金剛杖を身体を支えに使い、背負子を体に密着させて歩くと楽にポリタンクを担ぐことができました。何事もお札を届けました。富士山の

利益を受けた住民のなかには、私の身体に触ったり、顔をなめ回したりする人までいて驚かされました。パワースポットの富士山が発する「気」を、吸収しようとする信仰心が富士講の原点・意味であることを学びました。

その後のゴールまでの道のりも長かった。駿河湾越しに見える雄大な富士山の絶景を眺めながら、ひたすら沼津市の海岸線を歩きました。友だちは旅をやめ、ひとりぼっちになりました。やっとのことで大瀬崎にたどり着き、「神池」に富士山頂の雪解け水を流し入れました。私にとって、10日間かけて富士山と駿河湾がつながった瞬間でした。富士講の信仰心を体験し、富士山が身近な存在になりました。

わたなべ・とよひろ
都留文科大教授